
ラストソード

Asakkyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストソード

【Nコード】

N0779BA

【作者名】

Asakkyo

【あらすじ】

病に倒れ、以来学園の寮で眠り続ける妹を助けるべく、マトは学園長の許可を得て、旅に出ることに。

目指すは、どんな病も一瞬で治すという伝説の聖剣があるという幻の都市 サムライタウン。

果たして彼は、妹を救うことができるのか――？！

少女は眠る

夢を見る。毎晩、毎晩、見る夢は同じ。俺を苦しめるその夢には、美しくも儚く散る白百合の花が毎回現れる。その花から涙が零れ落ちる時、俺は目を覚ます。

「またか。これで何回目だか」

俺が思うに、その花はきつと妹なんじゃないかと。

隣で眠る、透き通るように白い肌が自慢の、金髪の美女を見つめながら、俺は今日も起き上がる。

そこに居るのは、俺の妹のアリス。アリスは昔っから人懐っこくって、時々見せてくれる笑顔がたまらず愛らしい。

そんな彼女の笑顔を見れる日は、もう来ない。何故ならば、彼女は何者かに襲われ、罹ったら永遠に治らないといわれている病に倒れたからだ。俺は、大切な妹のアリスを守りきれなかったのだ。だから、彼女はこうして今も眠ったまま、その愛おしい瞳を閉じたまま、俺にあの頃見せてくれた素敵な笑顔を見せられないのだ。

悔しい。

正直、このまま彼女を、最後の鼓動が鳴り響くまで見守るわけにはいかない。そう思うようになったのは、アリスが倒れてから10年経った現在いまなのだ。

「ごめんよ、アリス」閉じたままのその瞳を見て、俺は言う。

許してもらえるなんて思ってたない。

でも、償いだけはしてやりたい。

守れなかった償いを。

「ごめんよ、アリス。悪いのは俺だ。全部、俺のせいなんだ」

彼女の耳に、否、心に、届いているかなんてわからない。

でも、謝りたい。一生懸命、俺のしたことを償いたい。

だから俺、決めただ。

これだけは許してほしいな。

「アリス、聞いてくれ。良い話だ」眠る少女に語りかける。

「俺な、どんな病も治してくれる聖剣を探しに、旅に出ることにしたんだ。もし、見つけたら、お前の病を治してやるから、それまで、待っていてくれないか。お願いだ」

眠る彼女のベッドの前で、黴臭い床に頭を擦りつけ、土下座をする。

「この通りだ。許してくれ、アリス……！！今まで、ずっとお前のそばに居たんだ、ちよつとの間だけでも、良いだろう？」

俺は震えていた。腕に相当、力が入っているらしい。その震えを無視し、俺は顔を上げてみる。

「アリス……？」

やはり、眠ったままだ。

でも、俺はもう決めた。

「アリス、俺、お前のこと絶対、裏切ったりしないから。帰ったら、ずっとお前の傍にいてやるから。お前が目覚めたら、俺はもう旅なんかしないから。ずっとお前と一緒にここで卒業の日が来るまでずっと一緒に居よう。卒業してからも、別の土地と一緒に引越して、そこでずっと一緒に暮らそう」俺は、目覚めぬ少女を見つめたまま言う。

「約束だ。約束した以上、守るよ。だから、許せ」

最後の一言は、掠れてしまったが、思いは伝わるだろう、きっと。

立ち上がると、俺は最後に、眠り続ける少女を見ると踵を返し、自分のベットの上に並べた荷物を背負うと、自分と大好きな妹の部屋の扉を開けた。 新たな希望と、絶対の約束を胸に。

少女は眠る（後書き）

時空切り師【マト】を一から書き直ささせていただいたものです。
タイトルも考え直し、このようになりました。

ご意見等あれば、活動報告にコメントください。

第1章 出会い 01

廊下を出れば、綺麗に磨かれた窓を介して溢れんばかりの日差しが、俺を出迎えてくれる。見れば、そこには雲一つ無い晴れ渡る空と、天高く昇る太陽が。

「良い天気だ……」

廊下のだ真ん中で、一人呟いた。

「言葉が返ってこないって、こんなに寂しいものなのか。ま

あ、この時間に誰かとすれ違うことなんて、滅多にないしな。仕方ないといえば、仕方ないか」

なんてひとりごち、少しだけ誰かがこの廊下を通らないか待ってみたが、誰一人として来ないので、俺は真っ直ぐ学園長室へ向かった。

「入りなさい」

軽くドアをノックしてすぐに学園長の声がしたので、中に入る。

「失礼します」

ドアを開け、一礼。

「はいはい、そんなんいいから、早く来なさい」

めんどくさそうな言い方で、俺を手招きする学園長。

「相変わらず、いい加減なんですな、学園長は」

学園長はいつもこれだ。呆れたため息も出ない。

俺は学園長の机の前まで来た。

「私のことは気にするな。……で、今日はどうしたの？」

学園長は、新聞を眺めている。

「えーと、長期外出の許可を頂きたく……」

と、中途半端に言葉を切ると、学園長は新聞から目を離し、俺を

見つめる。

「おや。そうかい」驚いたのはその一瞬だけだったらしく、すぐに新聞に視線を戻すと、無精ひげを撫でながら、含み笑いをする。

「まあ、頭の可笑しい君のすることだ。許そう。社会面まで読んだら、下の階の者に連絡しとくよ。君はもう行きなさい。列車に乗り遅れるぞ」

「ありがとうございます。それと、もう一つお願いが」

新聞から視線を逸らさぬまま、学園長が聞く。

「何だ」

「妹のアリスの面倒も、見てやってほしいのです」

学園長は無言で頷いた。

「わかっている。あの子のことは、私と理事長に任せなさい」

俺は最後に入り口で学園長に再度一礼すると、ドアを閉め、そのまま一階で必要な手続きを済ませ、そのまま駅へ向かった。

第1章 出会い 02

駅に着いた。

俺は今居るこのマジントン駅からサムライタウン駅へ向かうための切符を買おうと、到着したばかりの始発のサムライタウン行きの列車に乗る。

途端に、列車の扉が閉まった。列車が動き出す。

入り口から一番近い部屋に入ると、ドアを閉め、窓際の腰掛に荷物を置き、その隣に俺は座った。

「ふう……」

マジントン駅からサムライタウン駅までの間には、35の駅がある。

俺が昔降りたことのある駅は、そのうちの3つ。この国 マジカランスの首都マジントンの西にある都市ウエストマジントン駅と東側に位置するイーストマジントン駅と、魔術書で有名なマーホロンの駅だ。

中でも、マーホロンは、中学校時代に妹のアリスと一緒に教科書を買った記憶がある。アリスは実技魔術の書をとても気に入っていたが、俺は実技が苦手なので、理論系の教科書を、買ってすぐに熟読した。

今となつては、優等生だ。魔術のことは、大抵のことは知ってる。基礎から応用までしっかり俺の脳内には網羅されている。

……って、そんなことはどうでもいい。

日頃の疲れを少しでも減らそうと、軽く背伸びをしてから、窓に視線を向ける。いつの間にか列車はトンネルを抜け、イーストマジントン駅に到着していた。

「あれ……。もう、イメージまで着いたのか。早いなあ」

イメージとは、イーストマジントン駅の略称である。

「お腹空いたなあ……。って、今何時だ？」

窓の上に掛けられた時計を見ると、午後12時を回ろうとしていた。

「えっ。もうこんな時間?!」

記憶を辿ってみる。 いったい、どうしてこんなに時間がかったのかを知るために。 一番時間がかかったのは、学園の一階での手続きだったよな。その後は……、切符買ってから改札口に並んだよな。 あ、そういえば、長い行列ができてたなあ。それもあるのかも。

「まあ、仕方ないな。予定より2〜3時間ズレるけど」

列車がまた動き出したと同時に、空腹と強烈な眠気に襲われた俺は、睡魔に負けて、眠りについた。

列車が止まる所為の揺れで目が覚めた俺は、真っ先に窓を見やる。

「あ。ここだ」

車窓から、太字でサムライタウンとあるのが見え、すぐに荷物を取って下車した俺は、改札口に繋がる階段を駆け下りていった。

サムライタウン駅は、この国で一番小さな都市である。また、この都市ではこんな伝説がある。

サムライタウンには、人の病を治す伝説の聖剣がある。

初めてその話を聞いた時は、そんなのはただの噂で、実はそんなもの有りはしないんだ。……って、思っていた。

嘘ですよそんなの。って、その伝説を知る先輩に言ったことがあった。そしたら、何を言ってるのかねキミは?というような顔で思い切り睨まれた。

だから俺は、信じることにしたのだけれど。

「本当にそんなものがあるのかねえ」

改札口を抜け、外に出れば、建ってから20年以上は経っていなうな、木造3階立ての屋敷が正面に見えた。

「さて……。どうしようかなあ」

とりあえず、右に曲がってみることにした俺。

実はこの時、その屋敷の2階の窓から誰かが俺を双眼鏡で見
たらしいが、全然気付かなかった。

第1章 出会い 03

道を右に曲がってしばらく歩いた先に、その家があった。俺は軽くドアをノックし、開くのを待った。

間もなくドアが開き、中から白髭を蓄えた老紳士が出迎える。

「やあ、マトくん。さあ、中へお入り」

俺の名を呼んだこの人こそ、偉大なる魔術師 マジントンの末裔で、切取り魔術を完成させた人なのであり、俺の地元のマジントンでは彼を偉大なる魔術師の子といわれている、らしい。

俺はそんな彼のことを師匠と呼んでいる。

「お邪魔します」

偉大なる魔術師の末裔 名前はマジエーク は、笑顔で俺を中へ招き入れると、その偉大なる魔術師の末裔の証ともいえるような背中、セーターとワイシャツの裏に隠された筋肉と骨の頑丈さをあらわしていた。

「どうぞ」

彼が案内した部屋は、20畳はありそうなりビングだった。

「好きなどころに座って待ってて。お茶用意してくるから」

俺は近くにあったソファの端に腰掛けて、マジエーク師匠が戻ってくるのを待つ。

「俺もすごい人になりたいなあ……。新しい魔術でも考えようかな」

でも、俺には切取り魔術がある。これを上手く生かして何か新しい魔術を。

なんてことを考えていたら、マジエーク師匠がトレイにお茶の入ったマグカップを2つ持って戻ってきた。

「ありがとう」

先に礼を言い、お茶を受け取る。

「いいえ。……さあ、始めようか」

彼も俺の前にあるテーブルにお茶を置くと、向かい合うように座る。

「どこまでやりましたっけ」

「なんだ、もう忘れたのか。最後に練習したのはいつだったかね」俺が師匠にここでお茶を飲みながら魔術の個人授業を受けるようになったのは、今から5年前といったところだろうか。最初はとても怖い人だと思っていた。何故ならば、その当時、マジエークを怒らせた者は生きて帰っては来れぬという噂が、彼の家の周囲で流れて、俺はそれを信じていたからである。

が、何年か師匠と一緒に魔術の勉強をしている間に俺はそのような噂は信じなくなった。師匠は、そんなことしない。だって、師匠は絶対怒らないし、魔術だっていつも優しく教えてくれる。それに、俺は彼の怒る姿を見たことがない。俺は思う。じゃあ君は師匠の怒っている姿を、その顔を、一度でも見たことがあるのかって。まあ、そんなことはどうでもいい。俺が彼に教わる魔術は一つしかない。

切取り魔術だ。

「そうですねえ……。5年ぐらい前でしょうか」

「もう、そんな前になるのか……。時というものは早いなあ」

彼の切取り魔術は、俺の通う学校で習う切取り魔術とは少し違う。どの辺が違うかというところ。

「で、教えてくださいよ師匠。本当に覚えてないんです」

「ああ、そうだな。すまん、すまん」

師匠は一つ咳払いをし、俺を見る。

「前は……、花の散る木曜だったから、他で取ってきた花のオブジェクトを復元させる魔術を教えたはずだ」

「そうでしたね」

俺の学校で習う切取り魔術とここで習うその違いの一つとして、まず挙げられるのは、他所の国あるいは都市で切り取ってきたその土地で見たものの一部を、再現するという、撮影系切取り魔術。

まあ、カメラで撮ってきたものを専門店で見像してもらったところを自分で現像しちゃおうというような魔術である。師匠曰く、これも切取り魔術の一種なのだそう。ちなみに、これは俺が師匠に初めてあったその日の最初の授業で教えてもらった切取り魔術で、俺の一番好きな類の切取り魔術だったりする。

「その魔術なら、もうマスターしたも同じですよ師匠。で、今日はどのような切取り魔術を」

「そうか。撮影系切取り魔術は、基本中の基本だからな。しっかりと覚えときなさい。それでだな、今日は創造系切取り魔術を教える」。師匠が立ち上がった時、俺と彼一対一の特別授業が始まる――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0779ba/>

ラストソード

2012年1月6日22時50分発行